



大友亀太郎（『明治大正期の北海道（写真編）』より転載）

り、蝦夷地に渡った。

蝦夷地での初仕事は木古内の開墾。自ら土を掘り、モッコを担ぎ、この仕事を見事完成させた。箱館奉行は亀太郎の実力を認め、続いて大野平野を開拓しよう命じた。ここは狐や狼が棲む大変な荒地地で、亀太郎はかなり苦労したという。しかし、彼は挫折することなく、師である二宮尊徳譲りの報徳精神を発揮して作業員たちにあたわりの心を持って接し、自ら率先して開墾を進め、短期間でこの仕事を成し遂げた。

この木古内・大野の実績が箱館奉行はじめ幕府上層部の信頼を高め、亀太郎は「蝦夷地開拓掛」「石狩場所農夫取立繰込方」に任命され、石狩地区の本格的開拓を手掛け

ることとなる。

大友堀

慶応二（一八六六）年四月、亀太郎は治水・土木工事に深い知識を持つ一〇人とともに石狩の野に足を踏み入れた。一行は既に入植していた篠路開拓の祖・早山清太郎に道案内を頼み、開拓に適した土地を求めて石狩河口から南へと進んだ。野獣の声に怯えながらの野宿を重ね、伏古川の川べりを遡り、ようやく開拓地として相応しい農耕地を見つけた。そこが「三元村」となる。

五月中旬、亀太郎はまず用水路の開削に着手する。豊平川の支流を水源とし、現在の南三条橋辺りから一直線に北六条まで通し、そこから北東に折れ、北一三条東一六丁目の大友公園のところで伏古川に繋がると、およそ四キロの水路である。

人跡未踏の原始林の中、木を伐り、草を刈り、道を開削するところから始めなければならなかった作業員たちの苦労は、想像

もし明治維新が無かったら、札幌の中心は亀太郎が開拓

した東区元町になっていた

かもしれない。



明治4年の大友堀（「一ノ村新堀川（大友堀）/田本研造（函館）」、北海道大学附属図書館所蔵）

を絶するものであった。そして完成したのが九月九日。まさに突貫工事、驚くべき速度であった。

その秘密は作業員への手当にあった。決まった賃金のほか、働きに応じ能率給を支給したのだ。働き手の中には一日三両以上になった者もいたという。当時としては破格の賃金であり、人々はこの工事を「一万両の大工事」と呼んだ。

こうして完成した人工運河が「大友堀」である。今の札幌村郷土記念館の場所に役宅を設け、辺りに大友堀の船着き場と物資保管用の倉庫を建設。人々はこの役宅を大友役所と呼んだ。

移民計画の頓挫

次のステップが開拓移民集めである。

亀太郎は、箱館奉行所の直営農場（御手作場）を造成し、毎年一〇戸の入植をめどとした移民計画を立てた。その内容は、農

民の保護と生産性向上のため、入植後三年間は老若男女を問わず、一日一人当たり米五合と味噌などを支給し、さらに家屋を与え、向こう一三年間、税を免除するというものであった。これも「農民が豊かにならねば、藩も富まず」という師・尊徳の教えであった。

しかし、この頃から徳川幕府の威光が徐々に薄れ、蝦夷地開拓の意欲も失せてしまったため、亀太郎の計画実施が難しくなった。結局五合扶持は二年足らずで終わり、家屋もついに与えることができなかった。

その後明治の世となり、明治二（一八六九）年、亀太郎は土地の開拓を開拓使へと引き継ぎ、翌年小田原に帰郷。その後、神奈川県議会議員となり、明治三十（一八九七）年十二月十四日、六四歳でその生涯を閉じた。



大正7年頃の創成川と帝国製麻株式会社札幌支店（北海道大学附属図書館所蔵）